

鎌倉市教育委員会 令和5年12月定例会会議録

○日時 令和5年(2023年)12月13日(水)
9時30分開会 11時18分閉会

○場所 鎌倉市役所第三分庁舎 講堂

○出席委員 高橋教育長、下平委員、朝比奈委員、長尾委員、林委員

○傍聴者 5人

○本日審議を行った案件

日程1 報告事項

- (1) 教育長報告
- (2) 部長報告
- (3) 課長等報告

ア 鎌倉市学校整備計画の検討状況について

イ 行事予定

(令和5年(2023年)12月13日～令和6年(2024年)1月31日)

日程2 議案第26号

教育長の営利企業等への従事について

日程3 課長等報告(2)

ウ 鎌倉市の教育に係る計画の見直しについて

日程4 議案第27号

鎌倉市教育委員会職員の人事について

高橋教育長

定足数に達したので、委員会は成立した。これより12月定例会を開会する。本日の会議録署名委員は朝比奈委員に依頼する。本日の議事日程は手元に配付したとおりである。なお、日程の4、議案第27号「鎌倉市教育委員会職員の人事について」は人事案件のため、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第14条第7項の規定により、非公開とするが異議ないか。

(異議なし)

高橋教育長

異議なしと認め、日程の4、議案第27号については非公開とする。それでは日程に従い議事を進める。

1 報告事項

(1) 教育長報告

高橋教育長

先月を中心にこれまで全市立小中学校を訪問し、校長や教頭と対話をしてきた。主に人事関係の話が多かったが、学校の様子も見ながら、管理職や教員の課題、これからやりたいこと等について聞いてきた。今後それらの施策に寄り添いながら伴走していきたいと思っている。訪問の際に、鎌倉市の地場産品やオーガニック食材を使った給食も堪能した。そのようなことも我々も発信していければと思っている。

福島県や福島市、青森県、京丹後市の教育長が鎌倉へ視察に来た。主な関心事がGIGAクール構想、主体的・対話的で深い学び等で、鎌倉市の学校を見て、非常に感心していた。この過程で浄智寺の朝比奈委員にも協力いただいたので、御礼申し上げます。視察に来たいという方についてはなるべく対応していきたい。

林委員と東京都板橋区にある板橋第一小学校に視察研修に行ってきた。また違う場でも報告できればと思うが、ある意味では子どもたち自身が学びのハンドルを握っており、個別最適で協働的な学びを実践している先進的な学校だった。例えば、クラス数が学年で3クラスであったが、クラス担任制ではなく学年で担任を持ち、3クラス全員を3人の先生で見ている。それぞれの子どもたちの学びの特性に応じた学び方を推進する具体の実践について視察したので、このようなことも教員に伝えていきたい。

学びの多様化学校の関係では、担当と一緒に様々な所に視察に行っている。不登校特例校の先輩である京都の洛風中学校や兵庫の生野学園、先日は横浜のN中等部のキャンパスなどにも行った。それら視察を踏まえながら、我々の学びの多様化学校の施策に反映していきたい。何より鎌倉でなかなか学校に行きづらいという子どもたちのためのものなので、どこの学校の真似をするよりは、まずは鎌倉で困っている子どもたちに寄り添ったものから逆算した施策にしていきたい。以上、現場視察等の報告をした。

対外的な部分としては、後ほど議案にかけるが、経済産業省の有識者会議委員への従事については、これに限らず講演、視察の受け入れ、取材対応等は、業務の支障のない限りなるべく受けるようにしていきたいと思っている。このような場で発信していくことは私も必ずしも得意な方ではないが、多様な場で発信していくと応援したいと思う人もどんどん増えて、鎌倉の学びや教育が豊かになっていくと思うので、なるべく外に発信する仕事は外交面で教育長としてしっかりやりたいと思う。外に出て仲間を増やしていくことにも重点を置いて仕事していきたい。

下平委員

11月22日に富士塚小学校の教育課題研究指定校研究発表会に参加した。共生体育という共に生きる

体育がテーマで、教員からこうしなさいと言われるのではなく、子どもたちが自らいろいろな発想をして子どもたち同士で自由に語り合って授業を作り上げていく姿を見ることができた。子どもたちが楽しんでいる様子、時に少々揉め事が起こっても子どもたち同士で会話しながら解決している様子など目の当たりにできて、非常に興味深かった。インフルエンザの影響により体育館で授業の予定だったクラスが休みになってしまい見ることができず残念だったが、やはり子どもたちにある程度委ねて、そして工夫しながらやっけていく、助け合っけていく姿を見ることができて、非常に興味深いところだった。最後に横浜国立大学の梅澤先生が心理学と繋ぎ合わせて、この体育の研究課題発表会についていろいろ話され、その話も非常に興味深く聞くことができた。

12月8日に小学校の音楽会へ行った。子どもたちの生き生きした姿に心を洗われ、うきうきするような時間を過ごすことができた。保護者も自分の子どもがいる学校と2校だけしか交代で見ることができないものを、私たちが見せていただき申し訳ない思いでいたが、だからこそ、私たちから子どもたちの頑張りの素晴らしさを伝えたいという思いであった。特に音楽という教科だからか、教員の個性がものすごく子どもに反映されていた。次々と学校が出てきて、教員が指揮しているのを目の当たりにして、ある意味興味深いし怖いと思いながら見ていた。教員が自分の趣味で与えたものを子どもたちが歌わされているように見る側が感じる学校、子どもたちに固さを感じる学校もある一方、子どもたちを巻き込んでのらせている雰囲気はこちらにも伝わってくる学校もあった。非常に記憶に残っているのは、自身も演劇をしていて、芸能に長けたわくわくが大好きな教員が、子どもたちにマリオの扮装をさせて、マリオブラザーズのテーマ曲とジャンボリミッキーを踊らせて、さらに演奏をさせ歌わせていたのは、会場が一つになり、見ていた子どもたちものすごくのっけていく瞬間が見られて、あのような時間を子どもたちが共有できるのはとても素敵な体験だと思った。非常に私自身も心が動く体験ができてありがたかったが、他の教育委員からもいろいろ感じたと思うので感想を聞きたい。

林委員

下平委員とほぼ同じだが、学校規模が学校によって全く違い、大きな学校は合奏するのが大変だと感じた。小さな学校は人数が足りなくて大変で、そこを教員が工夫をしてステージを作ったのだと実感した。印象に残ったのは小さな学校の教員が一人一人を見て、この子ならこれという役割を与えたことである。先ほど富士塚小学校の共生体育の話があったが、いわゆる音楽も共生音楽で、ピアノがすごくプロのような子もいれば、リコーダーのシラソぐらいしか吹けない子もいるのを一つのものにまとめるので、シラソだけしか吹けない子どもでもその曲の中の一端が担えるように教員が、「あなたはここをこのように演奏してね」としていることが伝わった。

小さな学校で、男の子が打楽器を叩いていたと思っていたら、途中からリコーダーを吹き、途中からまた違うところに行って叩いているというように、一人何役もやっていた。後で声を掛けた時に「あの子はずっとチョロチョロしているから、こういうとき役に立ちました」と教員が話していた。壮大な演奏をしている中で、見ていると子どもがあっちに行ったりこっちに行ったりして、それでも耳からは非常にまとまった音楽が聴こえるということは、先ほど下平委員が話した共生音楽だと非常に実感した。

11月17日に神奈川県市町村教育委員会連合会研修会があり、講師が梶田先生という私が若いときからいろいろ教育のことを語られている高齢の方であり、懐かしく思い参加してきた。新しいことを大事にしたいという話だったが、ほとんどが昔の懐かしい話で、このような教育をしてきたのだということ

を振り返ってきた。

富士塚小学校の教育課題研究指定校研究発表会における共生体育については、神奈川県の特に湘南地域は昔からインクルーシブ教育が非常に進んでいて、私たちが実際現場でやっていたときも、このような体育をやっていたように思う。共生という2文字がついて、今の教員は「新しい体育なのか」と思うかもしれないが、昔からこのようであったことは、是非どこかで伝えていきたい。

高橋教育長

神奈川県は体育に時代が追いついてきたと感じる。

長尾委員

私も音楽会に参加してきた。今回教員が非常にチャレンジしていたと感じた。教員が音楽を楽しむことと一体感を出すこと、そして音楽会という場をどう見せるかということ非常に考えていて、子どもたちの個性と共に一つのものを作ったという印象を受けた。本当に素晴らしい機会を提供していただき、それにチャレンジする教員の姿が見られてすごく私も感動して帰ってきた。感謝申し上げる。

(2) 部長報告

教育文化財部長

私からは市議会12月定例会の報告をする。12月定例会が12月6日の水曜日からは始まった。まず最初に一般質問があり、議員19名中10名からの質問があった。

1番目、竹田議員からは、校内フリースペースの設置に当たり、校内フリースペースの支援員や医療的ケア児の受け入れ体制についての質問があった。

2番目、岡田議員からは、歴史的文化施設の文化資源の活用ということで、和賀江島等の材木座地域の文化資源についての質問があった。

3番目、納所議員からは、市役所新庁舎整備計画についてということで、現在地の埋蔵文化財についての質問があった。

4番目、後藤議員からは、多様性ある教育ということで、主に不登校やいじめ等について、子どもたちの放課後の過ごし方や、学びの多様な学校等の不登校対策にも民間の意見等を取り入れたらどうかという質問があった。

5番目、前川議員からは、幼児教育ということで幼児期のインクルーシブ教育、少し発達の遅れた子の早期発見と早期療育についての質問があった。幼稚園・保育園・こども園と小学校の連携については、主に小学校への引継ぎについての質問があった。

6番目、中里議員からは、避難所（学校体育館）のことで、夏の暑さ対策についての質問があった。

7番目、日向議員からは、地域行事の保存と継承ということで、無形文化財としての指定に関することや、郷土芸能保存協会の加盟促進についての質問があった。

8番目、くりはら議員からは、インクルーシブ教育と多様な学びの場作りということで、不登校対策や多様な学び場、かまくらULTLAプログラムについての質問があった。また、歴史文化芸術の振興事業

に関して、生涯学習センターの利用状況や、鎌倉市にふさわしい博物館基本構想での、図書館との融合などについての質問があった。

9番目、千議員からは、教育の多角性ということでインクルーシブ教育、いじめ不登校の教育者の見解についての質問があった。

10番目、くり林議員からは、鎌倉の歴史文化についてということで、郷土芸能保存協会や若者へのアプローチ、歴史文化を未来に繋ぐことの質問があった。

その後、竹田議員から、くりはら議員の質問への関連質問として、いろんな学びの場づくりアンケートを実施した中で、不登校特例校を望んでいることが認められると私たちが発言したことについて、アンケートの結果だけを見たらそうではないのではないかという質問があった。もう1件が後藤議員の質問に関連することで、学びの多様化学校と通常の学校の「二項対立」と答弁の中で発言したところ、それは議会の議論を踏まえたものなのかという質問があった。

本会議は以上で、昨日教育福祉常任委員会があり、議案が3件、報告事項は当初5件だったのが1件追加になり6件であった。

まず教育委員会11月定例会でも話があった土地、建物の遺贈に係る和解については、意見なく総員賛成で可決された。鎌倉市学校給食費の関する条例の一部を改正する条例の制定についても、意見なくそのまま総員で可決された。令和5年度（2023年度）一般会計補正予算についても意見なく、総務常任委員会の附帯意見なしという形になった。

報告事項のうち最初に令和5年度（2023年度）全国学力・学習状況調査の結果の報告をしたところ、前年度対比で落ちている部分が多くあるので、その点に対する検討状況や、自由記述のところで児童生徒自身は自己肯定感が高いが、先生に認められているという感覚が少ないというところの関連の質問があった。また、アンケートは小学校6年生と中学校3年生を対象に行っているが、毎年の横だけではなく、縦の統計なども検討したらどうかという質問があった。

2番目、令和4年度（2022年度）児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査については、この調査は全国的に行っているもので、質問項目は基本的に変えられないが、毎回不登校になる理由が、「無気力、不安」が一番多く、その細かいところまでが把握できていない状況についてかなり厳しい質問があった。これについては来年度も何らかの対応をとっていかねばいけないが、項目を変えるというのは全国的な調査なので難しいため、そのうえで私たちに何かできることがないかということを考えなければいけないと認識しているところである。

3番目、いろんな学びの場づくりアンケートの結果については、アンケートは1割程度の回答率であり、回答率が低いということと、かまくらULTLAプログラムや教育支援教室ひだまり、不登校特例校、学びの多様化学校等に対する認識度がかなり低いという質問が多くあった。

4番目の学びの多様化学校の設置に向けた検討状況にも波及し、認識度が低い状態で不登校特例校を設置するのはいかがなものかという話があり、今までの3件は総員で了承されたが、学びの多様化学校の設置に向けた検討状況についてのみが多数了承という形で、報告が了承された。いずれにしてもいろんな学びの場づくりアンケートは、小学校3年生以上の全生徒児童保護者を対象に行ったので、そうすると通常どおり学校に行けている方への周知はなかなか難しいということを感じているところである。よって、回答率を10割に近づけること、学校に行けていない子どもたちからの回答というのがかなり高かったのでこの辺りをもう少し掘り下げていくことを考えていかねばいけないと思う。そも

そも不登校になっている子どもにアンケートを書いてもらうことはなかなかハードルが高く、その中でこれだけ回答がもたらえたことは私たちとしてはある程度評価しているところではあるが、その辺りがあまり議員には理解いただけでいなかったということを感じた。

5番目、鎌倉市学校整備計画の検討状況については、教育委員会定例会等で報告しているが、12月下旬から来月にかけてパブリックコメントを実施して今年度中の決定を見込んでいる。質問としては、こういう大規模改修、長期修繕よりも日々の小規模な改修等も計画的にやってくれないかという質問があった。今回、私たちは学校の統合のことまで触れていない状況にある。これは現在の児童生徒数が予想よりもあまり減っていないことと、フリースペースや特別支援学級、通級指導教室、地域開放の施設と、教室に現実的に空きが少ないということを踏まえてであるが、学校の統合について、また公共施設再編計画での拠点校構想とどのような整合を取るのかという質問があった。この質問に関しては、今後の人口の推計や、学校が維持できるかどうか等の状況の変化があったときに対応を考えていきたいと答弁をした。

今週の金曜日、12月15日に総務常任委員会が開かれ、そこで先ほどの令和5年度（2023年度）一般会計補正予算が議論されることになっている。本会議は12月22日の金曜日を予定している。

（質問・意見）

下平委員

前回の教育委員会でも、私たち教育委員が「無気力、不安」に関して申し上げたと思うが、鎌倉市だけの問題ではなく、おそらくこの質問事項がある限りどこの地域でもここに当たる人が多いと思うし、無記名でアンケートを取っても、私たちからアプローチすることも難しいということでは、あまり意味がないというか、逆に不安になってしまうので、文部科学省へ何か声をあげる、「他の市でも同じような傾向にあるのではないかと思う、このアンケート項目は今の事情に当てはまっていないのではないか」というようなことを意見することはできないだろうか。

教育文化財部長

現状でも機会を捉えて意見を申し上げているところだが、やはり統計を取りたいという国の意向からすると、項目を変えることがなかなかできない状況である。今後も文部科学省へ意見を出していきたいと思っている。

高橋教育長

少しアンケートの取り方が古くなってしまっているようである。経過を見たいという気持ちもわかるものの、「私からも文部科学省」に対してはコメントしたいと思うが、いずれにせよ不登校の子どもたちの本質的な原因に我々が迫る必要があると思う。他の調査項目も、例えば友達関係や学習の悩みが理由になっている。では学習の悩みが解決されたら、友達と和解できたら、学校に通えるようになるかというところやはりそんな単純な話ではない。子どもたちが持っている学びの特性や個性というものがあり、その特性が学校という場にフィットしていれば本当に毎日学校が楽しくて、毎日行きたいようになるが、なかなか今の教室の空間だと苦しいという子どもたちもいて、そこから対教員の悩みや学業の悩み、友

達関係の悩みなど様々な悩みが起因している側面もあると思っている。そのようなところが我々かまくらULTLAプログラムで注目してきた、それぞれの子どもたちの学びの特性、インプット、アウトプット、マルチタスクが得意なのかシングルタスクが得意なのか等、様々な子どもたちの特性に応じた学びを提供していくというところに通じていくと思うし、そこをうまく分析できず個別最適な学びが提供できないと学校が辛いとなってしまうのだと思う。そのため、調査とは別に、我々としてももう少し子どもたち一人一人の学びの状況や個性を見つめるということはまた別途やっていかなければいけないと思っているので、そこは研究していきたい。

(3) 課長等報告

ア 鎌倉市学校整備計画の検討状況について

高橋教育長

次に課長等報告に移る。報告事項のア「鎌倉市学校整備計画の検討状況について」、報告を願いたい。

教育文化財部次長兼施設課長

報告事項ア「鎌倉市学校整備計画の検討状況について」、報告する。議案集は1ページを参照願いたい。

本市の多くの小学校および中学校は老朽化が進行していることなどから、老朽化対策や長寿命化を図るために計画的な改修が必要となっているため、令和5年度（2023年度）中の鎌倉市学校整備計画の策定に向け取組を進めてきたところである。

これまで学校施設の現状と課題を踏まえ、学校の適正規模や適正配置等を総合的に判断しながら、建て替えや長寿命化改修、大規模改造等の再整備の手法や整備スケジュール等について、鎌倉市学校整備計画検討協議会の意見を聞きながら検討を行ってきたが、この度、鎌倉市学校整備計画素案検討資料として一定の取りまとめができたので本定例会で報告するものである。別紙の資料を参照願う。

こちらの資料の概要としては、第1章は1ページから2ページにかけて、計画策定の背景と目的や計画の位置づけ、計画期間の見直しのサイクルなどを記載し、第2章は、3ページから10ページにかけて、学校施設の現在の面積などの保有状況や、児童生徒数の推計、施設の老朽化や児童生徒数の変化、学校教育を取り巻く環境の変化などの現状や、それに対する課題を記載しており、第3章は、11ページから14ページにかけて、施設整備にあたっての基本的な考え方として、安全性や快適性、学習活動への適用性、環境への適応性、地域の拠点化の視点から整理している。第4章は、15ページから20ページにかけて、施設整備にあたっての諸室の配置や施設規模等に関する事項、小中学校の学校施設整備指針をもとに整理し、第5章は、21ページから22ページにかけて、施設整備の優先順位の考え方などについて、築年数に基づき、工夫を三つに分けて、それぞれの区分ごとに整備手法を整理している。

また、23ページから27ページにかけては、体育館やプール施設の整備や建て替えにあたってのスケジュールやコストの想定、コスト削減に向けた手法や事例について記載している。25ページの整備スケジュールは、実際の整備の順番がどうなるかについては、各区分の中で老朽化状況や教育活動上の課題

等を考慮しながら検討していくこととなるので、現時点では明記していないが、築年数などから、全体のスケジュール感をつかむために作成している。

また、端末では学校設置基準等に基づく校舎、屋内運動場の必要面積や平成 29 年度（2017 年度）から 30 年度（2018 年度）にかけて実施した学校施設の老朽化状況調査業務の結果、適正規模・適正配置について参考資料として載せている。

今後は、同協議会からの意見や予定している庁内紹介での意見等の反映を行った上で、12 月末から 1 月初旬を目途にパブリックコメントを実施し、そこで出された意見等に基づく必要な修正等を行うとともに、現在進められている公共施設再編計画の改定に係る検討内容と整合性をとりながら、所定の手続きを経て、令和 6 年（2024 年）3 月までに計画として策定する予定である。

（質問・意見）

特になし

（報告事項アは了承された）

イ 行事予定

（令和 5 年（2023 年）12 月 13 日～令和 6 年（2024 年）1 月 31 日）

高橋教育長

次に報告事項のイ「行事予定」について、記載の行事予定で特に伝えたい行事等があれば報告をお願いする。

（教育文化財部）

多様な学びの場づくり担当課長

ULTLA インパクトデイについて話をする。教育委員にはカラーのチラシを 1 枚机上に配布している。今年度も ULTLA インパクトデイを令和 6 年（2024 年）1 月 20 日の土曜日に鎌倉能舞台を会場に開催する。この ULTLA インパクトデイはかまくら ULTLA プログラムに参加した児童生徒等保護者、一緒に作り上げたクリエイター、そして会場に集まった学校関係者が、かまくら ULTLA プログラムでの学びを共有するとともに、子どもたちがプログラムでの学びを振り返ることで、新たな一歩を踏み出すきっかけを生み出すなど、子どもにも大人にもインパクトを与える機会を作るという狙いで開催する。内容としては、かまくら ULTLA プログラムの概要説明、ULTLA キッズの発表、先輩トーク、教育長や子どもたちを交えた座談会などとなる。先輩トークでは、厚木市出身のドローンパイロットである高梨智樹さんにご登壇いただく。高梨さん自身も幼い頃から体が弱く、ディスレクシア識字障害を抱えていたため自宅に引きこもりがちだったが、中学生のときに動画サイトのドローンの映像に衝撃を受けたのをきっかけに、ドローンに没頭し、16 歳でレースに初出場、レース歴わずか半年で国内大会で優勝し、日本代表になった方で、情熱大陸などのメディアにも取り上げられたことがあるので、ご存知の方もいるかと思

う。ぜひ教育委員にも来てほしいと思うので、よろしく願います。

(質問・意見)

下平委員

42番の行事「ヤングケアラー展示」について、「ヤングケアラー展示」というのは行事名として少しおかしいのではないかと。

高橋教育長

事務局で確認し、確認ができ次第報告する。

(行事予定報告はそれぞれ了承された)

2 議案第26号 教育長の営利企業等への従事について

高橋教育長

それでは、日程の2、議案第26号に入る。「教育長の営利企業等への従事について」、議案の説明を願いたい。

教育文化財部次長兼教育総務課長

議案第26号「教育長の営利企業等への従事について」、議案の説明をする。議案集6ページを参照願う。

本件の従事予定先であるボストン・コンサルティング・グループ合同会社は、経済産業省の委託事業である「令和5年度学びと社会の連携促進事業（「未来の教室」（学びの場）創出事業）」を受託し、当事業の遂行に際して諸分野に知見を有する有識者からなる「未来の教室」評価・検討会議を設置・運営している。

この度、高橋教育長に対し、当該会議の委員を委嘱したい旨の依頼があったが、教育長が報酬を得て事業等に従事する場合、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第11条第7項の規定により、事前に教育委員会の許可を受ける必要があるため、本教育委員会の許可を得ようとするものである。

なお、当該委員の委嘱期間は、本来令和5年（2023年）11月27日から開始となっていたが、先に述べたとおり、従事するには教育委員会の許可が必要なため、許可を受けた日から委員として活動を開始することとする。

高橋教育長

私から補足する。少しわかりにくいですが、何かというと、経済産業省の有識者会議ということになるので、内容は教育にいかにか外部資源を活用していくかということがテーマで、次の骨太の方針に向けて議論したいということでの委嘱となる。こちらに書いてあることがかなりテクニカルになっているので補

足説明した。スクールコラボファンドであったり、様々な企業との連携というような活動についてプレゼンであったり意見を言ってほしいということで、基本的にはこのような会議の委員の委嘱等は引き受ける方向にしたいと思っており、業務の支障のない限り、年次休暇等を活用して出席したいと思っている。これまでも講師や1回限りの諮問会議委員等は、規定上この会議までかけなくていいものになっていたが、今回は必要があるということなので、正式な手続きとして議案として諮ることとした。

(質問・意見)

下平委員

ただでさえ今も忙しいと思うので、年間どのぐらい会議への出席等があるのかが1点と、もう1点先ほど教育委員会の許可を得るということだったが、教育委員会が許可してその後議会や市長まで諮るのか、それとも教育委員会が許可さえすれば可能なものかその2点を伺いたい。

高橋教育長

まだ回数までは決まっていないが、年明けに第1回目ということで、6月の骨太の方針に向けて7回ほど会議があると聞いている。ただ基本的にはオンラインで開催して、それに対応できるということなので、引き受けていいと思っている。ここで様々な産業界や教育会、行政、政治のキーパーソンが同じ委員になっており、そちらとの繋がりはまだ鎌倉にもメリットをもたらすと思う。

教育文化財部次長兼教育総務課長

2点目は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の規定上教育委員会の許可ということになっているので、このあと議会の議決等は必要とはしていない。

高橋教育長

例えば、事務局の職員は教育長決裁にて営利企業等への従事について許可を得ている。ただし、教育長の営利企業等への従事については、教育委員会会議まで上げざるを得ないということである。

(採決の結果、議案第26号は原案どおり可決された)

3 課長等報告(2)

ウ 鎌倉市の教育に係る計画の見直しについて

高橋教育長

次に日程の3、報告事項のウ「鎌倉市の教育に係る計画の見直しについて」、報告を願いたい。

教育文化財部次長兼教育総務課長

報告事項ウ「鎌倉市の教育に係る計画の見直しについて」報告する。議案集9ページ及び資料「鎌倉市が目指す教育計画の在り方」を参照願う。

鎌倉市の教育に係る計画の1つである教育大綱は、平成28年（2016年）1月に第1期目の大綱を、令和2年（2020年）4月から第2期目の大綱がスタートをしているが、現行の大綱は令和6年度（2024年度）末までとなっており、令和7年度（2025年度）からの第3期大綱の策定に向けた現大綱の見直しを予定している。実際に、令和5年（2023年）7月19日開催の第1回総合教育会議において、今後、会議内での議論を始めていく旨が示されたところである。

一方で、現在本市では、教育に係る計画が3つ存在し、全体像が分かりにくい、関係性が曖昧である、教育現場等に伝わりにくい等の課題があると承知している。そこで、今回の教育大綱の見直しの機会を捉えて、教育委員会として「鎌倉がめざす教育の姿」、いわゆるグランドデザインのようなものについて検討を行い、教育ビジョンや各種計画間の関係性を明確化し、誰にでも分かりやすい表現でまとめたいと考えている。なお、検討は教育大綱の見直しと平行して進め、検討結果については、教育大綱をはじめとする計画に反映できるよう提案していく予定である。

今後、議論を進めていくにあたり、本日はその方向性について共有したいと考えている。したがって今回提示した次第である。

高橋教育長

ここからスライドを投影しながら、教育委員と教育大綱の今後、または鎌倉の教育文化の在り方についてディスカッションを行う時間を設ける。本日、意見をリアルタイムで可視化するグラフィックレコーディングという方法で議論を行う。ゲストとして田上誠悟氏を呼んでおり、我々の議論をまとめてもらおうと思っている。（オンラインにて参加。）

先日、教育委員会の管理職の中でも、ティーパーティという形で教育大綱に向けてディスカッションを行った。基本的に我々教育委員会の職員は、いろいろな教育的な課題があり、それにどう対応していくかということ議論することが多いが、一旦その思考を外に出してみ、一切の制約がなかったら鎌倉の教育文化にはどういった在り方があるのだろうか、どうしたいだろうかというところから議論してみたいと思い、もう少しフリーに楽しくわくわくするような議論を行った。その際に、本日も行う「グラフィックレコーディング」という方法で議論を行い、田上氏にリアルタイムでまとめていただいた。田上氏は元小学校の教員で、現在は様々な教育関係のコンサルティングを行っている。皆の議論が可視化されていくということで、楽しんでもらえればと思う。管理職からも、「普段制限、制約に縛られていることがわかった」、「わくわくを我々自身が大事にすることで子どもたちにわくわくできる環境を作ることができるのではないか」といった様々な話が出た。

改めて教育大綱の検討に向けての視点についてだが、現状の姿「As-Is、」を見つめて、鎌倉のあるべき姿「To-Be」を描く、そしてその「To-Be」と「As-Is」の差、ギャップというのが、我々がとっていくべきアクションということになると思う。今日は「To-Be」について重点的にディスカッションしていきたい。

（「鎌倉市が目指す教育計画の在り方」についてのスライドを指し）こちらは、先ほど教育文化財部次長兼教育総務課長から説明あったとおりである。一旦この型に縛られず、今日は発散型のディスカッ

ションができればと思っている。

（「鎌倉市の近年の教育施策の体系」のイメージ図を指し）鎌倉市の近年の教育施策の体系はピラミッド型になっており、様々な施策を積み上げてきた状況だと思っている。

改めて鎌倉の強みであったり、弱みであったり、または財産であったり、そういった「As-Is」を踏まえて、「To-Be」を描いていく形で教育大綱の議論を進めていきたいと思っている。

鎌倉市そのものの目指すビジョンは「世界に誇れる持続可能なまち鎌倉」と、今日も共生音楽という話が林委員からもあったが、「共生社会」である。これは教育が本来目指すべき姿と非常に軌を一にするものだと思っている、こういった社会を実現するための教育文化の在り方を我々が議論していく必要があると思っている。その中で、例えば1つのキーワードとして、以前の管理職とも議論した、「如意」というものがある。禅の言葉で、「意の如し」、まさに Well-being の禅バージョンと私は捉えているが、鎌倉で自分だけじゃなく、社会や他者全体も自由であるために、自他を尊重して多様な人々と協働してわくわくしながら、生涯にわたり自ら考え、主体的に行動するような子どもたち、探求者を育てていくというのも、一つフィットする議論ではないかと思う。また、鎌倉野菜もヒントになると思っている。鎌倉野菜は7色畑と言われているが、カラフルで少量多品種、高付加価値ということで、個性や弱み、そういったものは強みに変わっていく、活躍の場を通じてスタイルが作られていくというようなところで教育に通じるものがあると思っている。こういった議論を管理職とやっているが、今日はこれに縛られるものではない。

また、そのような姿を目指す教育委員会として、どういう在り方であればいいのだろうということを議論している。ピラミッド型の教育行政の重層構造と言われるような、上から下に落としていくといった管理的なガバナンスモデルではなくて、子どもたちを真ん中にして、子どもたちの学びを、教員や校長や、我々教育委員会がしっかり助け、支え、励ましていくということが大事な我々の仕事の仕方、流儀になるのではないかというような議論もしている。

そういった議論を踏まえて、まだまだではあるが、MVV、ミッション・ビジョン・バリューというところを議論している。ミッション、我々教育委員会の存在意義や何のために仕事するかということ、そしてビジョン、教育を通じて作りたい鎌倉の未来、そしてそのために、バリュー、鎌倉が目指していく教育、文化はどういったところを目指して仕事をしていくのかというところをクリアにして教育大綱に反映させていきたいと思っている。

（「教育文化を通じて実現したい社会（ロジックモデル）のイメージ図」（以下、「ロジックモデルイメージ図」という。）を指し）教育文化を通じて実現したい社会、ロジックモデルというのはこういうことだと思う。やはり、子どもたちの学びというのが真ん中にあり、子どもたちの学びに作用するありがたい教師の姿というのがあって、ありがたい学校の姿というものがある。その学校を応援するものとして、教育委員会のありがたい姿があって、ありがたい学校の姿や地域文化から、教育を通じてありがたい市民の姿に移って行って、その市民の姿が教育を通じて実現したい鎌倉の社会ということになっていくというようなロジック全体があると思う。（「ロジックモデルイメージ図」を指し）かまくら教育プラン、鎌倉市生涯学習プラン内容は、それぞれある程度の射程があると考えられるが、少しこの辺りも議論が必要であるため、今日はざっくりと暫定版ということになる。

今日、教育委員と議論したかったのが、管理職との議論と同じだが、予算など一切の制約を排して、これをやったらいけないとか、これはお金かかるとか、人がいるとか、そういうのは一旦置いて

において、本当に子どもたちのために、あるいは鎌倉のために、これからの鎌倉の教育文化をどうしたいかというところで少し意見をもらいたいと思っている。あまりにもざっくりしたテーマであるため、それを考える視点としては、今の教育大綱の5本の柱に沿っての発言でも良いし、先ほど説明したロジックモデル、ありたい教育委員会の姿、ありたい学校の姿、ありたい教師の姿、ありたい子どもの姿等、プレイヤー視点で考えての発言でも良い。あとは、先ほど説明したMVV、ミッション・ビジョン・バリュー等の側面からの発言でも良い。今日は、具体的な発言、「こういう施策が必要ではないか」といった発言でも良いし、もう少しビジョンのような抽象的な言い方、「こうなっていくと良い」でも良い、フリーに夢を語れるような発散型の議論をしていきたいと思い、場を設定した。

では早速だが、ここからフリーになるので、誰からでも良いので、一切の制約がなければ、鎌倉の教育文化どうしたらいいかといったような、自身の思いなどがあれば、発言をお願いします。

長尾委員

現在子どもの特性に合わせた学びということをよく垣間見るが、家庭の特性、例えば、平たく言えば裕福かそうじゃないかなど、そういったことでも子どもの教育は色がついていると思う。鎌倉は家庭の特性にとらわれない、本物の教育が受けることができるまちにできたらいいと私は保護者の立場含めて、常々思っていた。その本物の教育というのが何かというと、例えばこの間の音楽会でも、公立小学校の持っている楽器は、やはり数や種類が限られている。しかし、隣の私立小学校に行くと倍くらいの種類があり、見たことない触ったことない楽器を学校という公的機関で見聞きすることができる。家庭の事情に関わらず、鎌倉の全ての子どもたちが、開かれた環境の中でそういった本物に触れる機会を得ることが、公的にできたら良いと思う。

あともう一つ、先ほどの不登校の子どもの話があったが、キャリア教育についてもさらに早い段階で本物に触れていくことができるよう示していけると良いのではないかと思っていた。深沢中学校などでも行っていたと思うが、「世の中にはたくさんの仕事があり、あなたの特性に合わせた仕事はこういうところにあるのではないか」という勉強から、その先の自身の50年後が見据えられるようなキャリア教育を中学校ぐらいから子どもたちに見せていってあげたいと非常に思っている。何の制約もなければ、自分で行ってやりたいくらいであるが、そのようなことを理想として考えていた。

高橋教育長

「本物の教育」は、非常に良いキーワードだと思う。他ならぬ自然文化豊かな鎌倉での教育文化があり、さらに本当に多彩で多様な素敵な人がたくさんいるため、いいキーワードだと思う。

長尾委員

この間市長にも申し上げたが、鎌倉は、実は教育にお金をかけてる人が多いのではないかという私の仮説がある。公教育だけではなく個別に進学塾で学力をつけているというのは、子どもたちの教育に対して鎌倉では手放しで学校に任せれば良い、市に任せれば良いというようになっていないのではないかとすることがずっと課題感としてある。裕福ではない家庭も鎌倉であれば、自らの特性を踏まえて、やりたいことを踏まえて、本物に近づけていければ良いと思う。

高橋教育長

実際に、全国学力・学習状況調査の学習状況の部分の調査では、家庭及び塾での学習時間を聞く項目があるが、鎌倉の子どもたちは全国と比べて5ポイント以上も高く、家庭や塾で学んでいる機会が多いというこの調査項目は、学力とかなり強い相関がある。要するに、学習の習慣がついているということであり、そこが鎌倉の子どもたちの高い学力に繋がっていることは間違いないと思う。それが長尾委員の言ったような経済格差ということになってはならない。先ほどの家庭による差が生まれず、鎌倉に生まれたなら、というのは非常に素敵な意見である。

下平委員

私は女優業をしており、15日から主演の舞台があるが、それがたまたま昭和と令和を行き来する女性の役である。さらに、40年前に葬式ごっこをされ、自分が夢を持って生きることや存在することを否定される女性が、40年間生き延びてきて、そこを払拭するという非常に面白い役を演じる。その中で、昭和と令和はどう違うかというのを語る、「昭和の時代というのは便利さよりも人間を、そして繋がりを優先していた暖かな時代だった」というセリフがあり、それを噛み締めていると、確かにそういうところがあると思う。不便は不便だったが、必死に友達などと繋がろうとした、そして、繋がるためにどうすれば良いかということをしっかり考えていた時代だったと感じた。例えば待ち合わせ一つにしても、携帯がないため皆で確認し合ったが、今の若い人たちは「何時頃に渋谷で」、「今どこにいるか」等、LINEを通じて待ち合わせができる。そういうことは、昭和の時代はできなかったが、だからこそ顔を見て念入りに確認をし合ったり、わからなければ電話で親にも連絡しあったりしたということ、確かに私自身も演じながら非常に感じる機会になっている。

先ほど家庭と言っていたが、私は社会人教育を長くやっている人間として、社会人に何を伝えるかということ、「人間力」ということをいつも言っている。「人間力」とは何か、人間においての力とは何かということ、日々成長していく心、脳を持っているということと、繋がる力を持っているということである。人間は1人では生きられない非常に弱い存在だと思う。1人で生きることを宿命を持った動物は皆、牙や毒など武器を持っている。人間はそういったものを持たないで生まれてくる訳で、そもそもやはり繋がる存在として生まれてきてる訳である。この2つの「人間力」を失ってはいけないと思っている。そう考えると今この「人間力」が弱い気がしてならない。

一方で、これは全てではないが、大人から怒られなくなった子どもたちはかわいそうだという説があるが、十分に向き合える大人がいなくなった、怒るとハラスメントと言われ、私たちもものを言えなくなっている。だから若い人たちが育っていないという側面もある。それからいじめに関しても、人を攻撃する人は、自分が弱いため、攻撃して上に立とうとする、マウントを取ると言い方もあるが、そういった行動をとる訳であり、また、そういう人に迎合していれば、繋がってるということで安心してしまうという社会構造もある。自分自身の強さが育ちにくい世の中であり、そして人ときちんと繋がる、お互いに平等に繋がる力が失われていると感じる。

ゆえに、教育の中で、それを指導する私たち大人が、教員が心の強さをさらに持たなければいけないし、人と正しく繋がるということを教えなければいけない。そういうことを学べる学校であれば、人間だからその後少々トラブルはあるけれども、だけど乗り越えていける、克服して、自分の人生を切り開いていける子どもが育つと思う。学校では、学問や知識だけではなく、そういう人間としての力、社会

で生き抜いていく力を教えることができる、公教育は特にそういうことが求められているような気がしている。具体的に何と言われると難しいものがあるが、理想としては、そういうことを十分教えられる場であってほしいと思っている。

高橋教育長

「繋がり」というキーワードが出たが、本当に共生社会というのは、鎌倉市が目指すのであれば、学校は学力を高めるだけの場ではなく、そういった繋がりというものを、または共生社会での流儀、人と人との関係性など、そういったものを学ぶ場でもあると思う。非常に良い意見であった。

林委員

私は女優ではないが、昭和と令和を行き来したというところでいうと、昭和と令和を経験した教員というところで、同じだと思った。今、開かれた教育課程ということで、未来に向けてのいろいろなシステムが構築され、考え方も今進められている。先ほど教育長が時代が追いついてきたと言っていたが、昭和の時代は、世の中に出たら困らない子どもを育てようというのが私たちのキーワードであった。世の中に出て困らない子どもを育てるとはどういうことなのかといったときに、やはり地域と繋がろうとか、新しいことにチャレンジさせようとか、いろいろな子どもがいて良いのではないかと考えた。いつも「こういうことしたよ」と言いつけに来る子どもがいるが、その子どもに対し「だから何なの、どうしたの」と、今ならそれだと怒られてしまうが、昔はいわゆる外野が少なかったため、クラスの中で、「良いじゃない、〇〇ちゃんは勉強できないけど、ソフトボールをしたら打つでしょう」など、一人一人の良いところを、子どもたちにマイナスもオープンにして話げできた時代は幸せな教師だったと思う。後にクレームで、「うちの子のことこうおっしゃったようですね」と言われることはなかった。それで、「そうだよな、良いところもあるがマイナスなところもあって、補って、これで1つのパズルだよな」というような、先ほど下平委員が言っていた繋がりを作っていたように思う。

また、長尾委員が言っていた「学校に任せれば良い」というものがなければならぬだろうと確かに感じている。予算を度外視して良いということで、教育に関わったものとして、1つ目、この大綱にもあるが、やはり教育環境を公平性にするには非常に重要である。楽器もアコーディオンは20万円ぐらいするため、昔、音楽の先生をしていた方が、「なぜアコーディオンを椅子の上に置くのか、落ちたらどうするのか、下に置かなければ」と、非常に気にされていた。その20万円近くするアコーディオンも、もう鍵盤が黄色くなった何十年も前のアコーディオンであり、確かにそういう部分では私学とは異なる。学校によって予算の関係で買うことができない。校舎についても今日提案があったが、古くて困ってる学校にいる子どもは新しい学校では勉強ができない。すぐにすべての学校を綺麗にしてほしい、昔の箱型では学べない、今の学びに合った学校がほしいというのは一番最初の夢であり、そこに関わる教材教具の環境整備というのは、未来の学びには、これから必要になってくるのだろうと考える。

2つ目については、私は今大学で教員志望の学生の指導をしているが、採用が早まったので、大学2年生から面談が始まっている。志望理由としては、やはり小学校のときや中学校のときの先生の一言で自分が変わったこと、部活で苦労したこと、頑張ったことを伝えたいなど、原風景ではないが、そうい

う夢を持って、教員になろうとして必死に勉強している。しかし、面談の約束をする登録や提出が全くできないため、面談では最初にまずそこを説教する。社会人になったら提出、締切を守る、それが一番である。「何か不安なことはないか」と聞くと、「良い授業ができるか心配です」などと返ってくるため、「いや、まず締切までに出してください」と説教をした。その人間力のところでの指導が重要であり、そうすると何が現場で必要かという、新採用で来た教員が十分学んで自信を持って、私は1学級1担任制じゃなくて学年担任制を主張している人間ではあるが、自分のクラスの子どもたちと関わってほしい。そうすると、壮大な夢であるが、採用した1年目は副担任でも良いのではと思う。1年間研修を受け、いろいろな学級を見て回り、2年目に担任になり、初任者研修を受ける、そういったことをしていれば良いと思う。それから、予算を度外視すると小学校の教科担任制も良い。学年で見るとなると、やはり人材確保のための人件費が必要となるので、そこに潤沢なお金があれば、スタートでしっかりと教員を育てることができると思う。また、1年目の研修のときに、鎌倉市は16校しかないため、いろいろな学校の授業を見に行ったりするなどの交流をし、どこの学校に異動しても、ある程度学校の雰囲気わかれば、さらに鎌倉としての教育が充実するのではないかと考えている。

高橋教育長

夢ある教育環境にしなければいけないし、若い教員がこれから鎌倉の教育に携わりたいと思えるようにしながら、その人材を手厚く迎え入れられるようにし、働きがいを持ってもらうことが良い循環にもなってくると思う。また、各学校や学年の中の学級の連携など、私もそのとおりだなと思った。

朝比奈委員

いろいろな鎌倉らしさというのを考えたときに、私はお寺の和尚という立場もあるため、宗教的なことも授業で取り上げられると良いと思うことが時々ある。私の娘たちは全員、私立のカトリックの学校に行かせており、これはこれでカトリックの学校の良さがある。さらに言うと2人の娘は音楽を志して、声楽をやっているが、カトリックの学校でキリスト教を学んだことで、クラシック音楽の世界がより深く理解できたということがあり、音楽大学に行った際、カトリックの学校ではなかった友人と、キリスト教を十分に学んできた自分たちとは差があり、娘からカトリックの学校に行かせてくれてありがとうと感謝の言葉もらった。鎌倉には、教会も、神社も、お寺もあり、さらに町が大きすぎないため、非常にコンパクトにどこへでも行っているいろいろな宗教に触れることができ、歴史文化を学ぶことができる。もちろんずっとそういった授業はされているとは思いますが、私が授業の見学に伺った際、決められたカリキュラムをこなさなければいけないからか、学校の近くのお寺や神社のことに特化した授業など学校ごとに独自性のある授業を行うことは、時間的な制約があり中々難しいのだろうかと感じた。

もう一つ、最近なるほどと思ったことがある。昨日は60歳で亡くなった松竹の監督である小津安二郎氏の命日であり、12月12日は誕生日でもあるが、彼の映画を改めて見ると、昭和の、戦前から戦後にかけての人間模様が描かれている。浄智寺で映画祭がこの土日にあり、そのときに、小津氏のファンであるというイラン人の監督が来て、「なぜ日本の若者（映画監督等を志す人のことだと思うが）は、もっと小津氏のこの映画を見て学ばないんだ」と、「一つ一つの場面で、想いが込められてることを学ばないんだ」と力説していたが、細かく分析してみると、あのような映画というのは、娯楽大作という意味より、すごく人間模様を描いているところがある。私は伺いしそこねてしまったが、昨日、東京物

語という代表的な映画を上映し、ある映画監督がカットごとに解説をするという会があった。先ほど本物に触れるといった話があったが、鎌倉には本物を実践する方が大勢いる、鎌倉にゆかりのある映画監督、音楽家、鎌倉彫の方、陶芸家でいえば河村喜史氏など、近くの小学校の子どもたちは目と鼻の先で既に行ったことがあるかもしれないが、機会があるのだから、さらにそこを、それぞれ一つ一つ自由に生かすことができる時間というのがあれば良いと思う。それをやっていきたいと思っても、教員は時間が取れなくて諦めてしまっているかもしれない。また予算の問題もあるかもしれない。芸術家の方々もやはり暮らしていかなければならないため、無料という訳にはいかない。芸術家の方々にも十分な謝礼が差し上げられるような、何か仕組みがあれば良いと思う。

先ほどの楽器の話に戻るが、プロの演奏者に対して、高価な楽器を貸与する企業というのはあるが、そういったものではなく、地域の学校の子どもたちが等しく使えるような楽器を提供してくれるような仕組みがあると、より音楽の会などが楽しくなるし、本物に触れる機会ができる。限られた中で頑張っただけでやるということに意義があるかもしれないが、そういった仕組みを何とか作れないだろうか、せっかくの鎌倉の豊かな芸術文化資産を学校教育に生かしていけないだろうかとよく感じる場所である。

高橋教育長

宗教から文化、芸術、教育、すべて繋がったような言葉であった。今回教育大綱も文化や、地域の視点というのは当然加味しなければならず、学校だけのものということではない。もちろん子どもを中心に学校中心に考える必要はあるが、全体を見ていくものにしたいという思いである。本当に貴重な意見だと思うし、まさに他ならぬ鎌倉でも、持続可能な社会を目指すのであれば、そこでの本当の豊かさとして、Well-beingを追求するのであれば、朝比奈委員が言ったような芸術や文化の本物に触れるということに、資本主義を超えていくという意味でも通ずるのだろうと思った。

下平委員

皆の発言に繋げて感じたことだが、私は息子を、鎌倉ならではの教育を受けさせたいと思い、仏教の学校へ入れた。そこで親も子も座禅の体験をさせていただいたり、けんちん汁を皆で作って食べたりなどの体験は、親も子も非常に良い経験になったと思っている。政教分離などいろいろ難しい問題があるのかもしれないが、昔は寺子屋で学んだように、鎌倉で生きる子どもたちだからこそ、そういった良さというか、そういった鎌倉ならではの体験を、親も子もしてほしいという思いを強く持っている。

林委員からの意見にもあったが、私が小学校に行っていた頃は、特異な才能を持った子どもも、今だったら特別支援学級に入るような子どもも同じクラスであり、それが当たり前であった、それは1つの繋がり力だったと思う。逆に切り離してしまうことで、何か違うものというような考え方が生まれてしまうことも怖い点であるのではと思う。

さらに、約束を守れない、期日を守れないという話もあったが、教育課題研究指定校研究発表会などに行っても、これは苦言だが、教員は不適切な敬語を使っていることが多い。繋がる力を基本として社会で生きるために、皆が大事にしなければならないルールがあると思うので、約束を守るとか、期日は明確にとか、言葉も平等に生きるために目上の方に敬語を使うのであって、差を生じさせるためのものではないので、年齢の違う経験のある人と対等に話すために使う敬語などは、大事にしなければならない。そういったマナーやモラル、ルールなどを学ぶことができないのはかわいそうであるし、昔はそう

いうことを学ぶことが家庭でできた、あるいは地域に注意してくれる高齢者などがいてくれてきたが、今できなくなってるということは怖いと感じる。これは自分が年を取ったためかもしれないので、難しいところかもしれない。社会は変わるのかもしれないが、そういうことを小さい頃に学べないということは、将来繋がる力の障害にもなってしまうと思うので、大事にしてほしい。

また、芸術的なことで、私自身、仕事中心で生きてきて、厳しい状況の中で子育てもあってなど、精神的に非常に厳しいところで生きてきた中で、今は芝居に出会えたことで、ものすごく笑える時間とわくわくの時間がある。夜10時までと長時間稽古をやっているが、それでも楽しい人生、豊かな人生を生きることができているという実感もある。音楽会の子どもたちの姿や体育祭、運動会の子どもたちの姿を見ても、そういったわくわくする時間があるということが、心を守っていくことにも繋がるため、芸術芸能のようなものを大事にすることは非常に重要ではないかと思う。

高橋教育長

非常に広がる、深い話であった。共生社会の流儀やルールというのは、時代がということではなく、非常に大事な視点だと思っている。共生社会の流儀であるため、学校だけではなく、地域または家庭全体で育んでいかなければいけないものだと思った。また、私も少したがを外して言うならば、今の学校の制度は明治以来の学校制度であり、初代の寺子屋や仏教の学校の話もあったが、その150年程の歴史しかない一斉スタイルの教授方法を前提とした、近代工業社会を前提としたような学校の仕組みになっている。これが、ある意味では少し寺子屋のようになっていくのではないかと私は1つのモデルとして思っており、それが個別最適で協働的な学びと教育学的に言われたりはしているが、より子どもたちのやってみたいことややりたいこと、特性などに応じながら、それをどう価値付けしたり、ファシリテーションしたり、その学びを深めることができるようなサポートをしていくといった形になっていくのだろうと思う。ただの知識技能はAI、または様々なテクノロジーに置き換えられていく部分であるため、これから100年先も生きていく子どもたちを育てるという部分に立ち返って、先ほど林委員も言っていたように、子どもたちが学校を卒業しても、自分で生きてくために学び続けられるような、炭火のように自分を燃やし続けられるような子どもたちを育てていくやり方にしていかないといけないと思っており、それをどのようにしていくかも、また考えていかなければならない。

長尾委員

たがを外して、おそらく共感いただける方はほとんどいないのではないかという話をする。鎌倉市の学校はどこをとっても金太郎飴で、これで良いのだろうかとは私に思っている。例えば、学区を外して、「私は第二小学校の、ああいうところで子どもを育てたい」、「私は子どもを第二小学校に入れたい」、また、「私はあの先生に習いたい」といったときに、自分の行きたい学校、習いたい教員を選べるような、選ばれる学校、教員の制度を作ることができないかと思っている。私はサラリーマンもしているが、サラリーマンは淘汰されていく存在である。毎日毎日次の自分に向き合って、自分が世の中に何を必要とされてるのだろうかということを問いながら働いていくから、給料が上がり、知名度が上がり、例えば退職金が100万円の人がいれば5億円の人もいるように、世界観の幅がぐっと広がる、そういった精神が学校、教員にもあればと思う。先ほど私立、公立という話をしたが、私も公立を選ばなかった親である。私はそれを、鎌倉は公立が選ばれるような市になると良いのではないだろうかと思っている。

そういったときに、教員が金太郎飴ではない、「5年目はこうだから、6年目はこうだから、前回の学校はこうだから」という会話ではなく、自らのチャレンジ等を認め合える組織力、またそれを引き出せるような、カラーが出せるような教員作り、学校作りをすることで、保護者や子どもから支持され、児童数、生徒数が増えていくという仕組みがあれば良い。またさらにたがを外すと、できれば教員の給与を、評価に応じてどんどん上げていってほしい。差をつけるのは難しいだろうが、もしできるのであれば、評価基準が変われば、今の私の話が現実になるのではと思う。

高橋教育長

切磋琢磨は絶対に必要であり、鎌倉の学校に行きたいとか通わせたいとか、教員にも鎌倉で先生をやりたいと思ってもらえるような形にすることは非常に大事である。

林委員

私の息子の家庭は藤沢市だが、藤沢市は子育てがしやすいということで人気がある。その視点でいけば、鎌倉市の教育が良いから鎌倉に引っ越したいと思われるようなことを増やしたいという点は、長尾委員に共感する。公立の学校は、教員にとってプラスでもありマイナスでもあり、保障されてるから何でもできるというように前向きに捉える人と、保障されてるからこれで良いと思う人が混在していることが現実であるのかと思う。私は今、子どもだけでなく、教員にも多様性が非常にあると思わなければいけない時代になってきたと思う。先ほど言っていたとおり、個別の指導と協働的な指導というのがあるが、そこに指導の個別化と学習の個性化というのがまた分かれてある。それは、教員や管理職である校長、教頭にも、その時代が来たと思っている。よって、一斉に「子どもにこうしてください」と朝の打ち合わせで言っても、もう駄目な時代なんだろうと、わかっていない教員には「このようにしてみても」と個別に声をかけるなどする必要がある。それから、学習の個性化でいったら、自分が取り組むものの、分掌などを一律分けるのではなく、その分掌に適した教員が行うことで、自分の力を発揮できるといったことを考えて、学年人事をしたり、グループ分けをしたりしていく力を、今度は管理職が持たなければいけない時代なんだろうと、皆の希望でなどではなく、その見極めを、これから管理職がやっていかなければいけない時代が来たと思っているところである。

私の子どもは公立の学校に通っていたが、私は幼稚園から高校までカトリックの私学に進学した。今の自分があるのは、その学校のおかげだと思う。何が一番学校のおかげかというと、卒業生と同窓会でよく話すことだが、学校のおかげで理不尽なことに耐えられるようになった。笑い話だが、雨で小学校の遠足が中止になったとき、朝礼でシスターに「今日は神様の思し召しで遠足に行けなくなりました」と言われた。心の中では、「そんな訳ない、雨が降ってるから行けないのだろう」と思いながらも、そういうものを常に言われ、刷り込まれると、社会に出たときに理不尽なことに対して、「これは何か絶対意味があって、抜け出せる」と思うことができるような強さを育てられた。そういった学びがあった。それは、私学だからそういうところを強く押し出した指導ができたのではないかと思う。公立はなかなかそれが難しくなっており、こうやって昔の話を滔々と喋ることは、若い教員には酷かと思うときがある。今は保護者や環境、また働き方改革と言葉もでてきて、様々な要因で、非常に窮屈になってきたが、ぜひ美味しいところは引き継いでもらいたいと思う。

高橋教育長

林委員が言ったとおり、個別最適な学びは、指導の個別化と学習の個性化に因数分解される。AIドリルのようなものが個別最適な学びと思われがちだが、それは指導の個別化の方である。本当に大事であり難しいのは、学習の個性化の方であると思う。学習の個性化というのは、子どもたちの学び方や学ぶ目的というの、また多様なものであるということで、これをどう我々としてチャレンジしてやれるかは鎌倉らしい部分であり、林委員も言っていたような、今までの鎌倉でも子ども中心でいろいろなチャレンジしてきたこととともに、軌を一にする部分なのだと思う。

また、林委員の言っていたとおり、教員にも様々な制約はありながらも、まさに学習の個性化というか、わくわくしながら子どもたちの指導をするなど、学校のことを楽しんでもらえるような環境にしたというのが私も思っているところである。そこが自由や如意にも通じていき、それがまさに子どもたちにも伝わっていくのだと思う。

朝比奈委員

時々学校見学をするが、給食を共にしたときに、給食の時間が短すぎると思った。これは仕方がないことだとも思うが、子どもたちが食べ物に対する感謝の気持ちを抱く暇もなく、平らげて終わってしまう。教員もやっと給食の時間だという感じで、ほっとして召し上がっていることもわかるが、そこはいろいろなことに感謝していただいてほしい。基督教の学校だとお祈りのようなこともするだろうし、我々お坊さんの場合だと、いただくものに対する感謝もさることながら、自分が果たしてこの食事をいただくに値する修行をしているのだろうかという反省もしながらいただいている。お腹ペコペコだからあつという間に平らげてしまうのも自由ではあるが、給食費を払っているから食べるのが当たり前というような姿勢ではなく、用意されてきた物に対する感謝、生産者から始まって、作ってくださる方への感謝、また中学校だと、この間工場見学をしたが、工場で作ってるからといっても最終的に詰めている人たちは、学校の近所の方がパートとしてこられていて、「これはきつうちの子どもたちの友達が食べるだろう」、「うちの娘が食べるかもしれない」と、顔は見えないけれども、しっかり思いを込めて届けてくださっている食事をいただくにあたって感謝する、そういった時間が取れたら良いと思う。郷土食や地域のメニューが取り入れられたときには、確かときどき時間を設けて栄養士の方が説明する機会もあったと思うが、たまにではなく日常的にいただくものに対する感謝の気持ちを、ほんの数分で良いので、持てる時間があると良い。宗教的な考え方をせよと言っている訳ではなく、常識的にそういうことができないものかというのは、ときどきお伺いして感じる場所である。

高橋教育長

食を通じて、感謝や生きること等に通ずる深い話であった。私も先日、朝比奈委員と一緒にハーベストの工場見学に行き、印象的だったのは、工場長さんが、「いろいろな工場を持っているが、このパートさんは鎌倉の子どもたちのためにとあって鎌倉で働いてくれており、非常に意欲が高く、しっかり仕事をしてくれる」と言って感謝されていたことである。そういう方々に鎌倉の教育は支えられてる、いろいろなところから支えられてると思い、私も感謝したところである。

下平委員

今大谷選手のことも話題になっているが、先ほど長尾委員が言ったように、人間が成長していく、頑張ることができるためには、何かに選ばれたり、それから年棒に反映されたり等、やはり何かあると非常に高みを目指そうと思えると思う。現在、教員だけには限らないが、管理職になることを嫌がる若者が増えているが、そこにはそれになったからといって、何か認められる訳でもなく、やりがいや手応えが得られる訳でもないというところに社会の問題があると思う。例えば、公立の教員も良い教育をして選ばされると教育委員会に異動してしまったり、早く管理職になってしまったりするため、逆に頑張らない方が良いみたいになってしまうとすごくもったいない。大学でも現在、教授の評価は学生たちが成績をつけ、人気のない教授はすぐ辞めさせられるというのは当たり前であり、私も長く名古屋の大学で教授をやっていたが、やはり人気のある先生の授業ってどんな授業やってるんだろうと、教授も見に来たりしていた。やはり選ばれるためには工夫もしている訳であり、だからそういう意味では、教員も研鑽して成長していきたい、魅力的な人間として子どもたちに影響を与えたいという、ガッツや夢等を持っている学校であることが、まず子どもたちのわくわくにとっても大事なのではないかと思う。

高橋教育長

非常に共感するところが多い。私自身も教育委員会にいて、教育委員会の仕事はやはり楽しい、価値があると、教員や子どもたちのために仕事ができると思うことができる職場作りをまずしないといけないと思っている。また、教育委員会に来ることができたら、喜んでもらえるようにしないといけないと思う。本来、教員は学校の教員をやりたいと思っているところはもちろんあり、先ほど評価の話もあったが、報酬であったり、昇進であったりは、所謂認知心理等でいうと、外発的動機付けという部分になり、本当は内発的動機付け、やりたい、わくわくする、楽しい、Well-beingが高まるというところの方が、これからの社会では価値ある部分になると思うため、そこでの価値付けであったり、そういったものを子どもたちも持つことができれば、学校を卒業してもわくわくする、価値ある仕事をやっていくことができるように育っていくと思うので、テストで良い点数を取る、誰かに褒められるため、より数字を上げるためというものもちろん大事ではあるが、それだけではなく、さらにその向こう側でいくと夢のある話になる、そういった動機付け、価値付けを我々もやっていく必要があると思った。

議論は尽きないが、本日非常に多くのいろいろなキーワードをいただいたため、これを我々も紡いで、素案というような形でまとめたいと思う。本日は、田上氏にグラフィックレコーディングというような形でまとめてもらったので、今日の議論を振り返ってどういった議論であった等コメントをいただきたい。

田上氏

いろいろなキーワードが出たと思うが、最初から動画で議論を一緒に振り返っていければと思う。

本日のテーマは、一切の制約がなければ鎌倉の教育文化をどうしたいかということであった。MVVやTo-Beの話があったが、自由に鎌倉らしいものを考えていくということで、最初は未来の話であった。子どもの特性ではなく、家庭の特性にも捉われず、いろいろな本物に触れていきながら子どもたちが成長していけるよう、鎌倉らしく格差を作らずやっていけないかという話があった。未来から次は過去と今の話であった。昔は不便だからこそ繋がることに一生懸命で、いろいろな工夫があって正しい繋がり

があっただろうと、今は便利になりなかなかできてないがそこをどうしていくか、昔は世の中に出て困らない子を作るというところで、でこぼこがあったとしてもそれを多様性として受け入れていく、今にももちろんそれは引き継がれているが、それは教員も同じであると、ただそれでもやはり基本は大事であるため、最初の1年目は人材の良さもあるかもしれないが、研修期間が持てると良いという話であった。次は歴史の話であった。鎌倉の本物に触れることができる独自性、そのための時間と予算があると良い、やはり体験も大切であるという話であった。多様な人と繋がるというのは、本日ずっと出てくるキーワードであったが、その体験も地域も家庭も、今、昔と全ての時間軸が出てきたが、きっと全てにおいて変わらないものがあるのではないか。それは食の感謝や、本当のことや大切なことを叱る、恐れずに伝えることはできる、そんな鎌倉らしいところがあれば、鎌倉市に行きたいと思える、教員自身も成長したいと思えるそんな鎌倉になるのではないか、そういったディスカッションであった。

実は、昨日3時間程かけて、鎌倉の教育大綱やかまくら教育プラン、鎌倉市生涯学習プランなどを見て、子どもたちの確かな学力といったところももちろん大事だと思うが、歴史のことも含め、鎌倉にはいろいろな支援があると思った。そのときにテクノロジーに流れてしまう部分もあるかと思うが、今日の話の中で、本当に大事な感謝の部分について触れていたが、それは人との繋がりでしか得られないことではないかと思う。先ほど話にあった学校を行き来できるような環境について、以前に高橋教育長とバスツアーしようかといった話をしたが、物理的に皆と繋がっていく時間ができる、皆の暖かさ、気持ちなどを大事にするというところが、鎌倉市らしいものができていくのではないかと思った。楽しい議論を聞かせてもらい感謝する。

高橋教育長

それでは田上氏はここまでとし、議事に戻り、報告は以上とする。

(報告事項ウは了承された)

高橋教育長

それでは次は非公開になるので、傍聴者及び関係職員以外の職員の退席をお願いする。

非公開

4 議案第27号 鎌倉市教育委員会職員の人事について

高橋教育長

以上で、本日の日程は全て終了した。これをもって12月定例会を閉会する。